

今回、Raspig 法による弁形成後の弁の表面の性状を弁病変の程度に応じ、病理学的、形態学的に検討し、さらに臨床例で血管内視鏡を用いて Raspig 法後の弁の形態を観察した。

8. Glutaraldehyde 処理豚心膜についての基礎的実験

(胸部外科)

西山 祥行・和田 壽郎・毛井 純一・
中島 秀嗣・曾根 康之・神楽岡治彦

Glutaraldehyde 処理豚心膜 (SPP) を10頭の成犬の胸部大動脈に Patch として移植し Dacron, Teflon を比較材料として、その強度や組織反応、仮性内膜の形成状態について、光顕および走査電顕により検討した。

その結果、SPP はしなやかで、Patch として縫着も容易であり、著名な瘤形成や変性、劣化、石灰化はなかった。また、Dacron, Teflon に比べても早期に薄層の仮性内膜形成がみられた。しかし、早い時期では表面の結合織層と仮性内膜との結合はやや弱く剝離しやすい傾向がみられた。Patch 周辺での組織反応もきわめて軽度であった。以上により、SPP は生体内補填材料として臨床応用可能と考えた。

9. Villitis of Unknown Etiology の臨床病理学的検討

(第二病院中央検査科) 藤林真理子

胎盤絨毛炎は胎児発育障害、流早死産、奇形等の原因となる胎内感染・先天感染を反映する病理所見として重要である。いわゆる Villitis of unknown etiology (VUE) は ToRC H complex (トキソプラズマ、梅毒、風疹、サイトメガロ・ヘルペスウイルス) に代って注目を集め始めている。

今回38例の VUE の検討で、各ステージの絨毛病理形態像、脱落膜からの炎症の波及の可能性、SFD 発生との強い相関などが明らかになった。VUE は決して稀な病変ではないが見逃がされる事が多い。コクサッキー A ウイルスが分離された例などが極く稀に報告されているが、VUE の原因は依然として不明である。胎盤の病理学的検索のルーチン化とウイルス、細菌学的検索の実施が原因解明の為に強く望まれる。

10. 再発し、旺盛な増殖を示し、臨床的に悪性と同様な経過を示す卵巣ムチン性嚢胞腺腫の2例

(産婦人科)

滝沢 憲・安田 摂子・遊喜 準子・
三室 卓久・稲生由紀子・井口登美子・
武田 佳彦

(病院病理) 相羽 元彦・平山 章

卵巣ムチン性腫瘍は、良・悪性群の間に、上皮細胞の増殖活動と核の異常を有するが浸潤破壊増殖は欠く中間群が存在し、病理診断が難しい場合がある。私達は、興味あるムチン性腫瘍を2例経験した。1例では、初回の減量手術後急激に腫瘍が増大し2回目の手術で大部分を摘除し得たにもかかわらず遺残腫瘍が再増大しており、もう1例では、27歳に虫垂原発の粘液腫を摘除して4年後に両側卵巣腫瘍を発生し、子宮漿膜や骨盤腹膜に粘液腫様所見を認めた。両方とも摘出卵巣の病理組織では、核の異常は少なく浸潤破壊増殖も認めず良性と診断した。後者で肉眼的に粘液染色腫様に見えた部位は、子宮漿膜の浮膜で粘液も陰性であったため、4年前の虫垂原発粘液腫より続発した腹膜偽粘液腫とは診断し得なかった。卵巣ムチン性腫瘍は、良性群といえども激しい増殖を示し、中間群との区分が難しい。良性でも遺残腫瘍が再発・増大するので、手術時完全切除しなければならない。

11. 甲状腺 follicular tumor の免疫組織化学的検討—Basedow 病甲状腺を対照として—

(病院病理科) 相羽 元彦・平山 章

Basedow 病甲状腺の汙胞増生過程で見られる一次汙胞・二次汙胞の関係が、腫瘍等の結節性病変に於ても見られるかどうかを知るために、91例の汙胞癌・汙胞腺腫・腺腫様甲状腺腫について、ホルマリン固定・パラフィン包埋材料より5枚の連続切片を作り、それぞれ H・E、間接法による thyroglobulin (TG), thyroxine (T_4), 0.1% trypsin 室温10分処理後、TG, T_4 (後2者は63例) の染色を行い観察した。結果と考察：(1) 3つの基本型が認められた。Ia：一次汙胞と二次汙胞の構造が種々の割合で混在するもの、Ib：主として二次汙胞の増生から成るもの、II：甲状腺発生の過程で見られる索状構造から成るもの。(2) これらの構造上で、コロイドを貯え、上皮が扁平化して行く成熟過程を一症例内又は症例間において観察された。(3) TG・ T_4 の染色性も成熟過程における一連の変化として捕える事ができた。(4) 成熟に伴うコロイドの TG・ T_4 染色性の低下は、trypsin 処理により回復した。

12. 肺横紋筋肉腫の1剖検例

(胸部外科) 中島 秀嗣・和田 壽郎・
寺岡 邦彦・金田 良夫

(第一病理) 豊田 智里・武石 詢

症例は76歳の男性である。昭和40年4月胃癌にて胃全摘術施行し、術後経過観察中に左肺野異常陰影を指摘され本院放射線科を受診した。喀痰細胞診、経皮膚